

最終聖職者

松葉醇平

玉の汗がぼたぼたと地面を濡らす。息を切らし、轟くような喘鳴を地に向け、両膝に手を付き、中腰で頭を振る。犬が全身に付着した水滴をブルンと弾き飛ばすように、髪の前端に降りてくる汗は地面の方々へ飛び散る。そのままの姿勢で首と目線だけを後方へ向け、追いかけてくる者がいないかを確認する。どうやら撒いたようで、坊主の姿は見当たらない。ホッと胸を撫で下ろしながら、また地面に顔を向け、水溜まり、もとい汗溜りをじっと見据える。汗水積あせみずくになったむず痒い尻穴を人差し指でひよひよいと掻き、漸くして静まつてきた動悸に少し気を緩め、ゆったりと腰を上げる。大きく息を吐き、自分がまだ生きていることに感謝感激した後、気持ちを切り替え、現在自分の置かれた状況を整理する。

俺は今、いかれた坊主に追いかけている。何故追いかけているのか、全くわからない。三十五年の人生を大した波乱に出くわすこともなくのうのうと生きてきた俺が、気の触れたスキンヘッドに追い回される覚えなど断じてない。とりあえず警察に相談するために交番へ向かおうと思うが、それまでに内容を整理して、滞りなく説明できるようにしておく。

俺は五日前に、親戚の爺さんの葬式の為に、五年ぶりに故郷であるこの糞田舎に舞い戻ってきたのだ。葬式を事もなく済ませ、一年ぶりだねえと顔を緩ませながら俺の頬をべちべちと叩く親戚に、五年ぶりだババアと心の中ではくそ笑みながら「お久しぶりです」とこちらもずんなりと事を終え、二日ほど実家でゆったりとしていた。そして帰省から五日目の今日、買ひ物がてらにこの小さい村を一周しようと思ひ、たまの緑を嗜むため散歩することに決めた。ならば買ひ物は隣の大きなスーパーへと思ひ、幼少期にもあまり通らなかつたルートを歩いて

いったところ、牛が顔を覗かせる牧場と水田に挟まれた道中で、前方から日光による自己主張の激しいハゲ頭が迫ってきた。服装を上から見下ろしていく。玉虫色の直綴じきょうを白衣の上に着飾り、更にその上に覆いかぶさるように、左肩から右脇にかけて真っ赤な袈裟を巻いている。下半身は、脛の辺りから僧衣の内側の白衣が垂れ、足袋を着け草履を履いている。歳は見たところ二十代半ばくらいで、身長はあまり変わらなそうである。この村を司る檀那坊主だんなかと思ひ、軽い会釈をすると、向こうも同じように頭を下げた。一瞬こちらに向けられた坊主頭に日光が反射して、俺の目を焼き尽くさんとばかりに襲いかかってきた。見知らぬ坊主からの突然の嫌がらせに腹が立つてきた俺は、愛想笑いしながら心の中では唾を吐き捨て、その場を後にしようとしてさくさく歩き出した。しかし坊主は何故かこちらに手を差し伸べ、握手を求めてきた。いざこざの後の和解ということなのだろうか、顎をしゃくらす程に満面の笑みを浮かべていた。しかし俺としては、聖職者である坊主たるものが、無章むしょうなる民に無慈悲なる悪行を繰り返した事への不快感で、到底その手をシェークする気分にはなれない。なので、その場に立ち止まってはつたと睨むと、坊主は俺の方へ一歩近づいてきた。俺は思慮深い男なので、瞬時に発生しそうなカタストロフを脳内に絞り出した。もしかしたらこの坊主は俺の和解拒否並びに猛禽的眼光に逆上して、襲いかかってくるかもしれない。神国日本を象徴する一角でもある聖職者を愚弄した罰として、制裁を食らわしてやる。ありえない話ではないだろう。俺はすぐさま目尻を緩め口角を上げ、不器用な笑顔で差し伸べられた手を取る。勿論心の中では坊主を猟奇的な方法でバイオレンスの限り尽くし、見るも無残なまでにぐしゃぐしゃにしてや

った。そんな俺の心を見透かしたのか、坊主は突如手を引つ込め、眉をひそめ、欧米女性がブサイクに抱きつかれたような、怒りと哀れみを含んだ視線を送ってきた。さすがは聖職者と思い、心をクリーンにして再度手を握ろうとすると、坊主はわなわなと体を震わせながら「違う、違うよ」と言ってきた。俺はプールでいきなりパンツを引き下ろされた時並みに意味がわからなくなり、「そんなに違うんですか」と坊主の発言に嘔み合わない言葉を発してしまった。しかし坊主は、俺の発言など端から歯牙にも掛けないような態度で「金だよ、金。チップー！」と叫んだ。金？ チップ？ 坊主が恐喝、俺膠着？ イエアーなどと阿呆の思考に陥っていたところ、坊主は更にはじり寄ってきて、俺の頬に張り手を打ち込められるほど急勾配の手を顔面に差し出してきた。流修行などで鍛錬されてきたであろうこの坊主の掌は、親戚のババアとは比べ物にならないくらい硬そうだったので、咄嗟に財布に手を伸ばしたが、前頭葉で飼育していた理論的な俺が「こんな不条理な要求をあつさり飲んでしまつて良いのか」と意見してきた。同じ前頭葉の、理論的な俺から少し下がったところにいる矜持の権化、これまた俺が「再考しろ！ 手を振り払え！ 鉄拳による裁きを！ 貴様の三十五年間は、チンピラ風情に金を掠め取られる人生ではないだろう？」と説き伏せてきた。言動はチンピラそのものではあるが、しかし格好からしてやはり寺坊主に間違いないわけで、流石に手を撥ね除け、腹部に一発お見舞いすることはできない。だが、彼らの意思は存分に伝わり、暴力ではない方法で反抗してみようと思いい、「嫌だよ」と情けない事を言ってみた。坊主は道理の間かぬ地頭を何とか言い合めようとする態度で「何を言っているんだ。これはこの村の決まりごとなのだそ

と言い放つた。俺が「決まりごとってなんだよ」と震え声で精一杯の返答をすると、坊主は眉を蹙め「私はこの村の全ての憂慮、災い、その他不吉なあれこれを、神よりと与えられし力によって浄化しているのだ。その恩賞としてお布施を献上するのは、村法以前に神の子たる人として当然の振る舞いだろがい」と、到頭イカレヒッピー張りの本性を顕にしてきた。ごちゃごちゃとわけのわからん説法を並べているが、要するにこれは詐欺まがいのゆすりである。もしかしたら本当に、坊主のコスプレをしたチンピラなのかもしれないと思ひ始め、いいように騙され続けてきた自分にも腹が立ち「ええい、そんな法律があるか。成敗してくれ、この悪党め」とファイティングポーズを構えると、坊主は偏袒右肩の赤い地蔵袈裟に包まれた左筒袖の中から白銀光りするリボルバーを取り出し、俺の顔面に照準を合わせてきた。いきなりの殺生兵器に絶句した俺は、泳いでいたプールが実はガンジス川であったというような摩訶不思議さえ凌駕する驚きで尻餅をついた。コッキング状態のリボルバーの銃口が顔面に向けられ、指が掛けられた引き金が今にも撃鉄を下ろそうとしていたので、尻餅のままの体勢で水田の方へと勢いよく体を投げ捨てた。俺の頭部をかすめるように弾丸が大蛇のごとくうねりをあげ、地面に突き刺さる。間一髪のところ回避した俺はそのまま水田へと投げ出され、頭から突っ込んだ。恐らく坊主は間髪入れずに発砲してくるだろうと思ひ、すぐさま起き上がって、重たい水を掻き分け、道路と反対側の、林の方へ足を動かす。その間にも坊主は再度撃鉄を引き起こし、俺の後ろ姿に向け発砲する。弾は俺の左右の水を高々と跳ね上げ、それは通過したカーペットの左右から小さな火花が

させるが、実際はそんな晴れ舞台とは程遠い修羅の巷である。運良く当たらなかったのは、恐らく拳銃の使用に慣れていないからであろう。素人が使えば、割かし距離のある標的に命中させるのは至難の技だ。最初の一撃で仕留められなかったこと、後悔するがよい。そう思った瞬間、弾丸により靴底の泥が押し上げられ、ドリフのように盛大に吹っ飛んだ。あと数センチ上に来ていたら、大往生を遂げる場所であった。もう一度体を起こし、何とか林の中へ逃げ込んだ。そこで一度後方を振り返ると、そこには瞠目すべき事態が発生していた。般若のごとき剣幕をした坊主が「おどら待たんかい、何逃げつけてかるんじゃ！」と両手を大きく振り動かしながら追いかけてきた。目の前の狂気に戦慄し、忽ち総毛立ち、地面が鳴動したかのような感覚に襲われ、また尻餅を付いた。しかし、ここで停滞してしまつては坊主の餌食になること必至だったので、震える臍を親指以外の四指でがしつと掴み、そのまま地面の方へ引き下ろし、その反動で立ち上がり、踏ん踏みながら林の奥へと走る。後方からは絶え間無い罵声と銃声が鳴り響く。前方からは行く手を阻むように張り詰められた蜘蛛の巣や交差に生えた竹藪が行く手を阻む。俺が一体何をしたのか、何故こんな目に合わされなければならないのか、涙を浮かべながらも疾走する。田んぼの水と、吹き出てくる汗で重くなった衣服までもが自分を妨害する障壁のような気がしてした。やつこの思いで林を抜け出し、飛び出た先は見ることがある光景だった。恐らく行きに通つた道でもあり、そういえば近くに廃屋がある事を思い出し、息急ぎ切つてそちらの方向へ駆け出す。廃屋まで辿り着き、ドアをこじ開けようとしたが、建て付けがあまりにも悪いため、微動だにもしない。更によく見れば、隠れるには

あまりにも好都合な場所、これではかえって目立つと思ひ、場所を変えるため改めて走り出す。しかし既にいたくたのよれよれであり、覚束無い足取りで逃げ果すのは困難であると思ひ、同時に心も折れてしまったため、到頭その場にへたり込んでしまった。だが、暫くしても坊主が追いかけてくる様子も、けたたましい咆哮も聞こえてこない。少し状態を起し、中腰のまま後方を確認すると、そこは断末魔の世界、ではなく鄙びた田園風景が広がるのみであった。

つい数分前の出来事を整理しているうちに、この村唯一の交番へ着いた。人口が少ない村の交番ではあるが、いわゆる「空き交番」と呼ばれるものではなく、常時一人か二人の警官が滞在している。最近塗装し直されたのか、建物の大部分を覆うほやほやの純白と、ローマ字で書かれたネームプレートを開く紺碧の色調が、僻地の中一際目立つ瀟洒な建物として、抜群の存在感を放っている。これなら先ほどの暴漢に出会した時でも、容易に見つけることができるだろう。

俺は、すいません、と小声で呟きながら、窓口付近で雑誌を読んでいる中年の警官に話しかけた。
「ちょっといいですか」

警官は机の雑誌を掴みながら椅子から腰を上げ、煩わしいといった態度でこちらに体を向ける。

「どうしました？」

「怪しい人物に追いかけているんですが」

「そりゃ大変だ」全然大変じゃなさそうに言う。「お名前は？」

山来貴弘です、と名乗る。ついでに住所など、事務的なものを聞かれた。その間警官はメモも取らず、先程から窓口の下、外来者からは壁で見えなくなっているとこ

ろに雑誌を置いて、そちらに視線を遣っている。隠しているつもりなのだろうが、さつき面倒くさそうに雑誌を机から持ち上げ、窓口の下に勢い良く叩きつけたのが見え見えだったので、隠しきれていない。そもそも、目を瞠る程の記事が見つかったのかどうかはわからないが、度々見せる、露骨に顔を雑誌の方へ突き出す動作はやめていたみたい。気になるのは仕方がないが、職務を全うする素振りくらいはして欲しいものだ。

「えっ？ お吉さん？」
「あっと、でもちょっと待って。そこまでコスプレという可能性もあるか」再び二つの指で顎を挟み、悩みだす。「その拳銃って、なんだった？」
「リボルバーです」
「お吉さんだ」健やかな笑顔でそう言った。
「あの、お吉さんって」
「そういえば余所の人だったね」
改まったように警官が説明し始める。

「余所人かい？」
心は雑誌に向いていても、一応住所を聞いていたようで、そう訪ねてきた。

「はい。久しぶりに故郷に戻ってきたんです」

警官は、ほうほうそうかい、とまた聞いているのかわからない調子で返答した。

「それで、要件は？」警官が憎らしい顔をしながら、おちよほ口で聞いてくる。

「さつき言いました」

「もう一回頼みます」悪びれた感じもなく、さも当然といった態度で臨んでくる。

「拳銃をもった不審人物に追い回されました」杜撰な対応に不満を訴えるような表情で言っただけ。

「どんな格好？」

拳銃というワードを聞いても、さほど驚かない。日常茶飯事ということでもなさそうに。

「坊さんのコスプレをしたチンピラです」

「坊さんのコスプレ？ お吉さんの真似事かねえ」少し顔を歪ませながら顎を親指と人差し指の間に挟む。「罰当たりな事をするもんだ」

「左肩に真っ赤な袈裟を巻いていました」

「それお吉さんだ」警官がボンッと拳を打ち合わせる。

「お吉さんっていうのは、二年前からこの村にやってきた和尚さんでね、色々な御利益をこの村に運んでくれたんだ。時には疫病を直し、時には大災害から身を守ってくれたり、本当に感謝の限りだ。更にお吉さんは、あの仏教の開祖でもある、えーっと、なんつったっけ？
ごうだま、しっだーるだ？ 要するにお釈迦様だ。そのお釈迦様の最後の末裔でな、あらゆる奇跡を引き起こせるんだ。そんなお吉さんを称えて、村のみんなは『最終聖職者』様なんて呼んだりするんだ」

あまりにも胡散臭すぎて、途中で何度か吹き出しそうになったが、何とか堪えた。

「えっと、その、お吉さんっていうのが、俺を追いかけ回したチンピラなんですか？」

「チンピラじゃない、お吉さんだ」

随分とこの村の人間から慕われているようだ。俺に言わせてもらえば、あの鬼の形相はお吉さんではなくお氣違いさんだった。

「疫病や大災害を防いだと言っていたが、俺はそんなこと聞いたことないぞ」

もしそんな災厄があったのなら、例え未然に防がれたとしても、実家から連絡の一つや二つは来るはずである。

「私も聞いたことないねえ。でもみいんな言つとるよ、お吉さんが隕石から地球を守ったって」

「スケールでけえよ」

思わず口から零れてしまった。しかしこれで、あの坊主が嘘つき野郎のペテン師ということがわかった。

「そういえば、さつき君は拳銃を持ったお吉さんに追いかけられたと言っていたね」

「ああ、そうですよ」一番大事な事を思い出した。「あれは銃刀法違反ですよね？」

「いや、君が何かしらの法を犯した可能性がある」

「またもや度肝を抜かれた。なんと凶器を持ったエキセントリック青年坊主に追いかけ回された可愛そうな一般人が、逆に罪に問われようとしている。こんなことがあって良いのか。」

「法を犯したって、俺は何もしていないぞ！」

「しかしだな、お吉さんは罪のない者に銃は向けんよ」

「そんなことを言ったって」

「何か思い当たる節はないか」

「何も無いよ。ただお互いに会釈をして、そのあといきなり金をせがまれたから、文句を言ってやったら銃を向けられたんだ」

「なんだ、あるじゃないか」

警官は怒ったように腕を組み、ふっと息を漏らす。

「ダメだよ、ちゃんとお金を払わないと」

警官が発した言葉を理解するのに時間がかかった。というよりあまりにぶつ飛んだ言葉が返ってきたので理解しようがなく、むしろ顔面の穴という穴から様々な液体が吹き出しそうになった。それほどに驚いたのである。電車内で、こちらは何もしていないのに、いきなり女性が渾身の往復ビンタを打ち込まれた挙句、蔑むような顔

をした駅員に腕を掴まれ事務所に連行されるような気分だ。

「カツアゲを断つたのが違法なんですか？」

「人聞きの悪いこと言うんじゃないよ。きちんとした、この村の法だよ。お吉さんから恵みを授かった者は、その恩賞としてお布施を献上するのです」

一言一句あの坊主と同じことを、この警官は口にした。しかもその部分だけやたらと艶やかな表情になるのが、嫌悪感を助長させる。勘違いされては困るので確認すると、この警官は加齢臭もそこそこのおっさんである。

「そんなべらぼうな法律、聞いたことないぞ！」

「聞いたことがなくても、法は法なんだ。郷に入っては郷に従ってらわなければ」

「もしそれが違法だったとしても、殺されそうになる理由にはならないぞ。事実俺は死にかけたんだ。あのチンピラの方こそ、まず先に裁かれるべきなんじゃないのか？ あんなの、殺人未遂以外のなものでもないだろう」

「ところがどっこい」おちゃらかすような語調で言う。「これはお吉さんの為の法だから、お吉さんの好きなように執行して良いことになっているんだ」

いよいよ長年積み上げてきた常識だけでは処理しきれない次元に突入してくる。整理をしよう。まず、人間の生命を法的に剥奪するためには、死刑なる刑罰が執行されなければならない。そして死刑確定には最低でも一審控訴すれば二審、上告理由さえ認められれば最高裁までの判決があり、執行となれば更に長い年月を要する。ここ五十年間だけで言えば少なくとも判決から数年、長ければ十数年かけて死刑が執行されるのだ。そして死刑の量刑基準には様々な項目が有り、大変残酷性に富んでい

たり、社会に大きな危害を加えたりなどではない限り、そうそう死刑判決を受けるものではない。日本は、ちょっとした通行料を払わない程度で死刑になる国ではないのだ。それなのに、神の恵みだかなんだか知らないが、そんな物を渡さなかつた程度で、日本の伝統的死刑過程も経ず、それも絞殺ではなく即射殺とすれば、もうこれはなんのこっちゃわからない事態としか言い様がない。

こんな村法が正常な訳が無い。第一町村制は疾うの昔に廃止されている。地方自治体がそんな条例を認める訳もないし、となれば好き勝手に発した口伝てが広まっていったものだろう。村で勝手に決めた法律が法的な力を持つはずがないのだ。

「おいおっさん、あんた達みんな騙されてんだ、あのチンピラに」

「誰がおっさんだ。騙されてなどいない。騙そうとしてるのは貴様のほうではないか。この科人め、ひっ捕らえてやる」

警官が立ち上がった。雑誌のページがわからなくなってしまうように、丁寧に裏返してからドアの方へ向かっていく。

「おいおい、嘘だろ？ 話聞けて」

「うるさい！ 人畜生じんじゆうせいの話に聞く耳など持つか！ 最終聖職者様を馬鹿にしおって！」

ドアノブが上手く回しきれなかったのか、勢い良くドアにぶつかり床にすっ転ぶ姿が窓口の外から見えた。思わず吹き出したが、しかし警官に捕まるのは流石に危ないと思いつつ逃げ出す。舗装された道路を強く蹴り上げ、交番を後にする。後ろから「誰かっ！ あいつを捕まえてくれ！ あの大罪人を取っ捕まえてくれえ！」という怒号が鳴り響いた。しかし、近くには警官

以外の姿は見当たらず、誰にもその声は届かない。非常に残念無念である。お悔やみ申し上げよう。

だが、警官の声を微かに受け取った者がいた。左右二手に分かれた丁字路に差し掛かっていた所、林で隠れていた左側から人影が現れた。お吉さん、もといおキチさんである。慢心した直前に絶望の淵へ叩き落とされるのは本日二度目であり、泣く子も黙るおキチさんの相貌に恐懼をきたすのも二度目である。おキチさんは酔眼とも見て取れるとろんとした双眸で、口は下唇だけをやや突き出し、鼻の穴もぷくんと広がり、顔面だけで言えばアンニユイという感じではあるが、しかしリボルバーの銃口だけはきちんとこちらに向いていて、そのアンバランズさは一言でいうならば鬼である。

おキチさんが一歩前へ出ると、こちらが一歩たじろぎ、こちらが一歩後ずさりすると、向こうは調子に乗って三歩ほど前へ出てくる。そして絶叫しながら照準を俺の頭に合わせたリボルバーの引き金を引く。弾丸はまたもや当たらず、俺から右斜め後ろに五メートルほど離れた木に命中した。

「クソ、当たらねえ！」

聖人君主とは程遠い発言をしながら、左手に持っていたリボルバーを地面に叩きつける。開いた弾倉から薬莖がガラガラと落ちる。驚異の殺人兵器を手放した事による安堵でほとと息吐くがそれも束の間、おキチさんはリボルバーと同様に筒袖の中から七首あひくを取り出した。刃先をべろりと舐める光景は、本人ですらお坊さんであることを忘れていたようなそれである。

「待て、待て、待て。俺の話聞いてくれ」

「黙れ、糞が。ぶっ殺してやる」

どいつもこいつも聞く耳を持たない。段々と腹がたつ

てくる。こちらが下手に出ていれば、好い気になりおつて。

「おい、坊主」首をかしげ、挑発する。「よくも故郷のみんなを騙しやがって」

「一体何の話だ」動転する素振りはいらない。

「お前、村のみんなに『最終聖職者』様なんて呼ばせてるらしいじゃないか」

「俺が呼ばせてるんじゃない。みんなが謝意を表し、アクティブにそう呼んでいるだけだ」

「よくもまあいけしゃあしゃあと」両腰に手をつき、ふんぞり返る。「何が謝意を表し、だ。このインチキ野郎」

「なんだと？」カラスを追い払うように七首を俺の方へひよいひよいと突き出し威嚇する。

「和尚を装って変な法律作って、好き勝手にやってお前のことだよ。何が神の力だ。何が浄化だ。寺の坊主なら仏に帰依するもんだろ、この偽坊主め」

更に焚き付け、激情して襲ってくるのを狙う。拳銃を扱えなかったことだけで判断するのは危険だが、恐ろしく戦いのエキスパートということはないだろう。冷静さを失った素人ならば、こちらにだつて勝算はある。その為

に煽り、刺激し、ヒスを起こさせるのだ。

「お前がやっていることなんて、悪徳商法と何ら変わりはない。いや、それよりもひどいぞ、この潜りめ。こんな長閑で前近代的な村を騙して悪事を働かなくて、恥ずかしくないのか？ 俺ならみっともなく外出れねえよ。それに『最終聖職者』って、それはないぜ。ダサすぎる」

坊主が七首を持った腕をぶらんと下げ、体を小刻みに

顫動させる。上唇をアヒルのようにし、下唇を左へ思い

切り突き出し、眼球は焦点が定まらないかのように右往

左往している。触れれば即爆発しそうなくらいに仕立て上げられている。あと一言二言で、サタンを内に秘めたこの坊主は猛り狂うだろう。

「亀頭みてえな頭しやがって。お前は聖職者じゃねえ、生殖者だ。繁殖の殖だぞ。今度からそう名乗れ」

こちら十二分にダサイ決まり文句であった。しかし本来の目的はなんとか全うされたようで、坊主は突き出した顎の前で柄を握り締めながら目をひん剥き「てんめえ！」と言いながら、任侠ドラマのやられ役として登場するゴロツキ並みの威勢で突進してくる。坊主が三メートル程の距離まで近づくと一瞬俺はエルボーを繰り出す

姿勢を取り、その姿勢をすぐさまキャンセルし、ヘッドスライディングするように坊主の進行方向と垂直に倒れ

込んだ。突如手を振り上げられた坊主は、躊躇いもなく人に銃を向けた奴とは思えないように怯み、またすぐに

腕を下ろし寝転び始めた俺に、今度は違う意味で吃驚した挙句、倒れた俺の下腿部に爪先を掛け、七首を前方に

吹っ飛ばしながら転倒した。本当は顔面に肘打ちを決めてやろうかと思つたけれど、鍛えてもない腕に鋭い刃

が刺さつたりなどしたらと余計な事を考えてしまつたため、突然怖くなり防衛に走つたが、あたかも狙つていた

かのような素晴らしい結果になつた。俺はすぐさま先ほど坊主が佇んでいたところまで韋駄天のごとく走る。そして綺麗な前転をしながらリボルバーを掴み取り、立て

膝の状態で坊主の方へ構える。映画のクライマックスに

使えそうな程の可憐な動きであった。

「悪事を働く野蠻人め、粛清の弾丸を受けろ」

少々芝居が懲りすぎたか。言い放つた後に恥ずかしくなつた。

七首を拾つた坊主はむくりと起き上がり、こちらを向

く。デモーニッシュな気配を纏いながら、鬼神の走りで見近して来る。

撃鉄を引き起こし、迫ってくる坊主の顔面にリボルバーの照準を合わせる。そして、引き金を引く。空撃ち。しまった、何故気がつかなかった。弾が切れたから、目の前の坊主も捨てたのだろうか。

「ちくしょう！」
全くの当て推量に投げたが、鯨の背鰭のように突き出たリボルバー銃口上のフロントサイトが、坊主の照り輝く天庭にクリーンヒットした。首を大きく後ろに逸らし、両手を前方に伸ばし、手首は幽霊のようにぶらんと下げ、そのまま背中から地面に落ちた。仰向けに倒れた坊主は白目を剥き、舌をだらんと下げながら痙攣していた。

鈍器があそこまで狂い無く坊主の額を抉るとは思わなかった。出来すぎた運命に驚愕し、同時に力も抜けその場に頽れた。四つん這いで坊主の近くに這いより、意識の有無を確認する。放心したように目や口が開きっぱなしの顔と、小揺るぎもしない体を見て、完全に意識を絶っている事を確信する。フロントサイトが綺麗に決まった額はぱっくりと割れ、赤紅の液体が後頭部に向かって流れている。傷は残ってしまいうが、命に別状はなさそうで、安堵する。つい数秒前まではこんな諸悪の根源、生かしておくものかと思っていたが、こつちだつてまだ長い人生が残っている。殺人などで捕まりたくはない。

しかし、これからどうするべきなのか。この村の警察に坊主の罪科の数々を告発したところで、逆にこちらが反逆の罪に問われ、縄で縛り上げられ射殺されるの目に見えている。坊主のことなら火炙りだつてありえる。この村ではいけない。ならば隣町だ。この村は幸いにし

て一時間、ゆっくり歩いても二時間で一周できるほどの広さしかない。坊主を担ぎながら隣町へ行けるくらいの体力は、俺にだつてある。

坊主の手に握られた匕首を奪い、他に凶器を所持してないか確かめるため、体をまさぐる。どこにこんな鋭利な物をしまい込んでいたのかがそもそも不可解だが、他にゴツゴツしたものは見つからなかった。

前で結ばれた袈裟を解き、それを四等分に引き千切る。坊主を俯せにし、手首、足首、膝を縛り、括られた手首を臀部の上に置き、背中と一緒に腕を縛る。これで搬送途中に目覚められたとしても、後ろから首を搔かれる心配はない。

いざ運ぼうかと思つたが、足を縛ってしまったため、おぶるのが困難だということに気が付いた。仕方がないので、背中と腕を縛り上げた袈裟を担いで、引き摺りながら運ぶ。草履の踵と白衣が少しづつ擦り切れていくかもしれないが、仕方がない。不可抗力である。

先ほどこの坊主が現れた、丁字路の左側は危険なので、右折する。左側の道には、血沸き肉踊る坊主のエナジーに惹きつけられ、御追随し上げる輩が居ても不思議ではない。すれ違うだけでお駄賃をあげてしまうようなジババ共だ。なるべく村の洗脳済み阿呆垂れに出会さないように移動する必要がある。

等身大ドールのようにぐつたりとした坊主を引きずりながら歩行する。ある程度進んでいくと、交番前とは異なる道路は砂礫と亀裂に見舞われていたが、眼前に広がる牧歌的な風景は、坊主との戦闘で荒んだ心が洗われるようであった。その風景はあまりにも美しく、自然を愛した田園詩人、陶淵明の声すらも聞こえてくる景観である。耳を澄ましてみよう。耳朶に触れる、ダツ、ダツ

という音。これはまさしく、千六百年の時を超え、陶淵明がこの地に郷愁を覚え、彼の歌声が具現化されたものと言つて良いだろう。ダツ、ダツ。

「イダツ、イダツ」
背負つていたウンコカス野郎が目を覚ました。俺が一步歩くたびに苦渋に満ちた顔で悲痛な叫びをあげる。

「痛いっ、痛いっ、踵がっ、石がっ」スタツカートのように切れ味のある呻き声が発せられる。「踵があ！痛い！」

後ろを振り返ると、二本の赤い線が五メートルほど続いている。坊主もじたばたと暴れだすので、一旦その場に仰向けになるように降ろす。坊主は踵を地面につけまといと、膝が曲がりながらも必死に太股をあげる。俺はその辺の砂利を集めて、坊主の踵の下へばら蒔く。体力が切れ太股の力がなくなった坊主は踵を下ろし、ぎゃあという悲鳴を上げる。

「やめんかい！」ドスの聞いた声で坊主が吠える。「痛いのなら俯せになればいい」

坊主は即座に勢いをつけ、体を半周させる。服従したわけではないが、坊主が初めて俺の言うことに従つたので、少し気持ちがよかつた。

「お前、おれをどうする気じゃ」坊主が顔を起こし、睨み上げてくる。

「隣の警察署に突き出す」
「隣町？ どういうことだ」

「この村では、お前を裁ききれないと思つてな」
ここでは逆にこちらが裁かれてしまう。異端者としてむさむさと正義の粛清を受けるのはごめんだ。俺はジャンヌ・ダルクではない。異端はお前らだと、村の人々の目を覚まさせなくてはならない。

「俺にこんなことをして、ただでいられると思つとんのか？」

「お前はただの犯罪者だ。しかるべき審判を受け、しかるべき処罰を受ける」

「犯罪者は貴様の方じゃ！」坊主が歯ぎしりをする。「これは謀反だ。重罪だぞ。生きてこの国から出られると思ふな」

驚いたことに、この坊主は純粋に自分を偉大なる為政者だと思つていようだった。嘘を突き通しているような演技には、とてもではないが見えない。それほど憎悪が、今この坊主から溢れ出ている。元々はお人好しが集まるこの村を鳴ろうと思つていたが、あまりにちやほやされすぎて、自分には本当に不思議な力があるのではないかと錯覚してしまつた。そんなところではないだろうか。

こいつに更生の余地はあるのだろうか。いや、そもそも何人殺めてきたか分からぬような男だ。娑婆に帰つてこられる可能性すら怪しい。

「さあ、いくぞ。ぼうつとしてるとお前の信者に見つかつちまう」

立て、といつて背中袈裟をつかみあげる。

「待て！ 踵が擦り切れるだろうが！ なにかあてがうものを持つてこい」

自分の立場をまるつきり理解していない偽権力者もたまや暴れだす。何も言わずに肘を曲げながら袈裟を思いつき引き上げ、背負い込もうとする。

「おい、聞いているのか？ やめろ！ 誰か、誰か助けてくれ！」

「うるさい、大声を上げるな。見つかるだろう」

坊主の口を手で覆う。叫声を遮られた坊主は、丁度唇

の間に来た中指を、突き出た前歯でカミツキガメのごとく食らいついた。痛みを怯み、手を離すと、坊主は更にくたたましい悲鳴を上げる。止むを得ず、坊主から取り上げた匕首を握り締め、気絶させるために柄を坊主の頭に向け振り上げる。

そこで、今までの奇想天外の全てが序章に過ぎないといふような出来事が目の前、俺が来た道からやってきた。俺は匕首を振り上げたまま硬直し、村の住民が次々と目の前に集まつてくる姿を、呆然自失と眺めていた。一番避けなくてはならない事態として頭には置いていたが、いざとなると、理解不能である。どんどんと人が集まつてくる。凶器を振りかざす俺に恐怖し竦み上がる老婆や、坊主の身を案じて泣き叫ぶ若妻、その隣で怒りを頭にし歯を食いしばる土方風の男。同じく怒り狂つた、最前列にいるさっきの警官が許しがたい凶悪殺人犯を撃ち殺さんと、俺に銃を向ける。突然銃を向けられた俺も、咄嗟の異常事態により、坊主の首を腕で締め上げ、そこに刃を向ける。警官は殺人の牙をむき出しにした俺に顔面蒼白しガタガタと震え、所々から悲鳴が上がる。

なんだこれは。どうなつていんだ。身動きの取れない人間に刃物に向け、警官を筆頭として大勢の村人に囲まれてい。これは完全にアレではないか。サスペンスドラマでよく見られる、行き詰まつた犯人が人質を取り最後の悪あがきをするシーン。犯人？ 俺が？

何故だ何故だ何故だ。どうしてこうなつてしまったのだ。こんな光景、良識のある一般市民が見たつて、悪役が俺であるのとは一目瞭然だ。違う。悪役は俺じゃない。俺はこの無法者に正義の鉄槌を下しに来た善人であり、大悪党はこの坊主だ。それなのに、なんでお前たちは怯えてるんだ。おい、そこ。カメラを向けるな。

「は、刃物を下ろすんだ」警官が精一杯の声を絞り出す。俺は未だにどうしたらいいのか分からず、ただ眼前の事態を呆然と眺めるしかない。冷や汗がとめどなく溢れ続け、マンボウのように開きつばなしの口に侵入していく。

警官が放つた言葉に反応もなく、坊主の首元に刃をちらつかせ続けている俺の凶悪性を察知したのか、段々と悲鳴が増え、大きくなつていく。憤懣ふんたいやるかたなしと身を乗り出した男共は、今にも襲いかかつてきそうである。「貴弘！」

熱り立っている土方風の男の後ろから、思いもよらぬ言葉と声が聞こえてきた。五日前に、五年ぶりの再会を果たした母、三千代である。

「貴弘……」

母が前に出てくる。警官を含め、周りの者が瞬時に俺と母の関係を理解したようで、皆道を開ける。母は警官よりも前、俺と三メートル位の距離まで接近し、息子の顔を見据える。

訳がわからない。もし今時のドラマでこんなラストを見せられたら、時代遅れだと憤怒してリモコンを投げ捨ててしまふ展開である。これは本当に現実なのだろうか。もしかしたら、夢ではないのか。最初坊主に出会つた時からそうであつたが、あまりにも現実離れしすぎているのだ。

わからない、全くわからない。何よりわからないのは、俺を悟さんとばかりに対峙しているこの母の登壇だ。現実で起こるべき場面ではないだろう、こんなもの。

「貴弘……馬鹿なことは止めて、お吉様を離して頂戴。そんなことをしたつて、何の為にもしないのよ」果たして、母は説得を始めた。愚息をやんわりと睿め

るように、哀れみを含んだ優しさで諭してくる。

「あなたはいい子でしょう。そんな馬鹿な事をするような子じゃないでしょう。ちよつと、都会の生活で溜まった鬱憤が、縛られ続けてきた不満が、出ちゃっただけなのよね。ほら、ここ、なあんにもないのどかな村だから。安心して、ちよつと羽目を外しすぎちゃっただけ、そんなのよね。私は知ってるのよ。お葬式の時も貴弘、初めて会う方にも久しぶりの親戚にも、とても礼儀正しく挨拶してたことを。家に帰ったら料理も手伝ってくれたし、洗濯物だって。昔からそうだったのよ。貴弘は、とても気遣いの出来る子だった。三年ぶりに顔を見て、昔と変わらず手伝ってくれて、嗚呼、この子はきつと生まれつき親切が好きで堪らない、優しい子なんだって」

母親の優しい声に、目頭が熱くなる。自分は悪くないという意思を徹する一方で、やはりここまで大きくしてくれた母に悲しみを与えている自分への情けなさを感じる。我知らず、いわれない罪を認めてしまいたくなる程だ。ただ、親戚もそうだが、何故執拗に俺の到来時期を間違えるのか。最後にこの村にきたのは五年前だ。年寄りの親戚共はいいとして、親は息子に会った時期くらい覚えておくべきだろう。

「刃物を置いて、貴弘。今ならまだ間に合うわ。今すぐ罪を認めて懺悔すれば、命だけは助けてくれるわ。だって、最終聖職者様は寛大な心をお持ちなんだから。心優しい貴弘が必死にお願いすれば、きつとその誠意も届くわ」

坊主の横顔をちらりと一瞥する。目尻も口角も釣り上がり、既に殺すことは決定していて、どのような猟奇的な方法で殺すかを考えている表情だ。こんな表情の奴が、懺悔を受け入れる菩薩の心を持つはずがない。

「お願い、貴弘！ 刃物を置いて、お吉様を離して！」

解放したら最後、無残な死が待ち受けていることが明白なので、体勢を整え、匕首を握り直し、刃を坊主の首にあてがう。

「お前ら、下がれ！ 警官と男どもは武器を捨てろ、早く！」

「ちよつと、貴弘。本気なの？」

「いいから、早くしろ！ 来た道に戻るんだ。早く！」

ちんたらしていると、お前らの大切な坊主が命を落とすぞ。これでは完全に殺人犯である。しかし、こうしなければ、こちらの命がない。

皆、拳銃や棍棒、裁縫バサミなどを地面に投げ捨て、あどずさる。しかし、母だけはそこから一步も動かず、体をガタガタと震わし始める。

「あんた！ せつかく母親が惨めな思いさして許し請うてやつとんのに、このクソ息子！ あんたなんか親不孝もん、死んじまえばいいよ！」

突如怒り心頭に発した母は、「このばかちんがあ！」と言いながら突撃してきた。親族の突然の逆上に戸惑い、当然刃を向けることは出来なく、背丈の変わらない男を捕まえている以上避けることも出来ない。そのまま坊主を挟んで母と追突し、坊主を手放してしまった。母はそのまま俺を押し倒し、マウントポジションを取る。坊主は住民たちに回収され、裁縫バサミで袈裟を切り取られた。

最強の防壁である坊主を失った俺は、母親を押しわけ、隣町に続く道へ走り出す。

坊主は警官が投げ捨てた拳銃を拾い上げ、逃げていく俺の背中へ向けて発砲する。直後に母の金切り声が聞こえた。

「三千代さん！」

警官が母の名を叫ぶ。一瞬後ろを振り返ると、左腕を抑えた母がうずくまっていた。

「おい！ 何ぼさつとしてる！ 追え！ あいつを逃がすな！」

背後から坊主の叫び声が聞こえた。それ以上は振り返らず、ただひたすら走る。大勢の足音と、坊主の罵声を背に、死に物狂いで疾走する。一瞬視界に入った母の姿がチラチラと脳裏を掠めながら、親不孝もん、というセリフが何度も反芻された。

*

膨大な量の汗が、アスファルトに染み込んでいく。膝に手をつき、酸素を取り入れようとせわしなく喘ぐ。燃えるような蒸気が全身からゆらゆらと燻り、絶え間無い喘鳴が体の奥底から放たれる。つい一時間ほど前に、同じような状態で息を切らしていた気がする。その時と違うのは、ただならぬ罪悪感と焦燥感に苛まれていることと、通行人の注目の的になっていることである。当初の目的地であったデパート前は人通りが多く、こんな道のど真ん中でびしょ濡れのまま死にそうな顔でいるのだから、好奇の目で見られていても仕方がない。

狂ったように心臓が鼓動する。疲労からの動悸ということもあるが、落ち着いたところでおさまりはしないだろう。動悸を最も激しくさせているのは、母親を見捨てた罪悪感であり、安否を確認するまで静まることはなさそう。腕を押さえていたため、大事に至っている可能性は低そうだが、ご老体ということもあり、とても心配である。

「通行人を呼び止め、警察署の場所を聞く。ずぶ濡れの不審人物に話を掛けられた通行人はギョツとしていたが、そんな事を気にしている場合ではない。」

「教えてもらった情報によれば、ここから歩いて五分もかからない所にあるようだ。その通りで、デパートから直線に歩いていくと、すぐに着いた。」

「村の交番に瀟洒なイメージを抱いたが、この町の警察署はどちらかといえばファッショナブルに富んだ外装である。半円の水色ポーチが波のように伸び外來者を誘う形で、ポーチの先端は二本の大理石で支えられている。一、二、三階全てに窓がびつしりと構えられているが一つ一つが小さく、どこか小動物を模したようにファンシーな窓であったため、息苦しさはあまり感じず、近寄り難いような荘重さも抑えられている。」

「自動ドアを開く。思わずドキッとしました。」

「前方を見続け、焦点をずらさない男警官に話をかけた。村の中年警官とは違い、随分若くて、端正な顔立ちである。男前というよりは美青年に近い。」

「警官は顔ごとこちらに向け、ニコツと微笑みながら、口を開く。思わずドキッとしました。」

「こんにちは。ご予約された方ですか？」

「えっと、違うんですけど」

「あ、気になさらないでください。立て込んでいないので、大丈夫ですよ」記入欄の多い用紙を、机上のクリアファイルから取り出す。「本日はどのようなご用件でしょうか」

「不審な人物に追いかけています」

「わかりました。後ほど刑事課の者を連れてきますので、

「詳細はそちらへお願いします」

「さすがは若くして警察署の役員を任されているだけのことあって、快調に事が進んでいく。実際はこれがどれだけのスムーズなのか、そもそも彼がエリート警官なのかもわからないが、村で杜撰な対応を受けたばかりなので、そう思ってしまうのも仕方がない。」

「まずはこちらへご記入お願いします」

「既に机上に提示されていた用紙がよいつと前に差し出される。やはりこういう情報はきちんと紙として残しておくのが、本来の姿な気がする。聞くだけ聞いて、なんのメモも取ろうとしなかった交番に、糞を投げ入れたい。」

「ペンを走らせながら、ふと思いついた。あの坊主は二年前から村に来て、横暴を重ね続けている。きっと俺と同じような境遇に出くわした者も数知れないだろう。特に隣町であるこの住民には多いのではないだろうか。ならば今の俺のように、この警察署へ逃げ込んできた者も少なくないのではないかと。坊主の存在を知っていれば、良識あるこの町の警官が放っておくはずがない。それとも、もしかすると全員、この町に逃げ帰る前に殺されてしまったのか。」

「記入欄に質問事項を書き込みながら、訪ねてみた。世間話をするように、ざつとぼらん語調で。」

「隣の小さな村に、お坊さんの格好をした青年がいるの、知ってます？」

「最終聖職者様のことですか？」

「……」

「その名前で呼んで欲しくなかった。警官が一般人に様付けするなんて、そんな公私混同して欲しくなかった。俺を殺そうとした坊主を崇めるような、そんな艶やかな

顔で言つて欲しくなかった。ただ、色気を纏った美青年の、とろんとした表情は、筆舌に尽くしがたいほどにお美しかった。」

「最終、聖職者様……」

「はい、最終聖職者様です。お会いになれましたか？」

「はい、最終聖職者様です。お会いになれましたか？ 凄いですよね、あのお方。僕なんかみたいな若造が、下手に言葉を尽くして表現しても失礼なんで、いつも凄いの一点張りになっちゃうんですが、なんというか、もうオーラが全然違って。言葉では言い表せません。最終聖職者様は村だけでなく、この町にも御加護をあたえてくれるんですよ。でも、やっぱり間近でそのオーラを感じ取りたいですよ。僕、将来はあの村で暮らしたいんです。警官として、最終聖職者様の身の安全を第一に生きていくことが、僕の人生の目途なんです」

「警察署の外から、ぎゅいという急ブレーキの音が鳴り響いた。バイクのブレーキターン時に鳴るブレーキセンサーの金属音ではなく、重量感のある大型乗用車のブレーキ音だ。前頭葉で飼育していた俺が、最終警告を発していたような気がしたが、それどころではない。警官の発言に開いた口が塞がらなくなり、視界がぼんやりとしてくる。迷宮脱出直前にゲームオーバーの鐘が鳴らされたようだ。あるいは、頂上目前で、崖に突き立てたハーケンが外され、千メートル下の渓谷の奥底へ投げ出されてしまうような感覚だ。すぐさま打開策を考え出すべきだが、既に宙を舞う体はどうすることも出来ず、ただもがきながら絶望の淵へ落ちていくだけ。要するに、手詰まり。」

「いや、まだだ。冷静になれ。ただ一つ、助かる方法が残っている。それは、今すぐここから逃げる。そして、もっと遠くの警察署へ駆け込む。これしかないだろう

う。ただ、逃げ切れるかどうかが問題だ。

警官に急用を思い出したと言い、身を翻そうとしたその時、背後の自動ドアが開いた。ついでに警官の口も開いた。

「あつ、噂をすれば！」

警官が快活に身を乗り出し、歓喜の目を光らせる。俺は、打開策行きの最終切符をもぎ取られた気がした。背後でどんな事態が起こっているのか、否応無く察知せざるを得なかった。

「みんな、お久しぶり！」

背後からその声があると、署内の人間は職務を放棄するように一堂に会し、パンツパンツと手を叩き、お辞儀する。皆が俺を取り囲むように頭を垂れるが、信仰対象は俺ではなく、背後にいる、背丈の似た男だろう。

「嗚呼、額の傷と、その足。一体どうなされたんですか？」

警官が俺の背後に佇む男を見て、驚愕したように叫ぶ。

「大したことないよ。それよりも」悪魔の触手が俺の肩にポンツと置かれる。「確保してくれてありがとね」

肩に置かれた手から全身の血液が抜かれたかのように体温は落ちていき、唇や指先が皸くちやになるようだった。自然と下脛に恐怖の汁が溜まっていき、ライオンに首元を噛まれた小鹿のようになすすべもなく固まる。

「さて、どうしようか、貴弘くん？」

ゆっくり後ろを振り返ると、

「……最終聖職者様」

がいた。